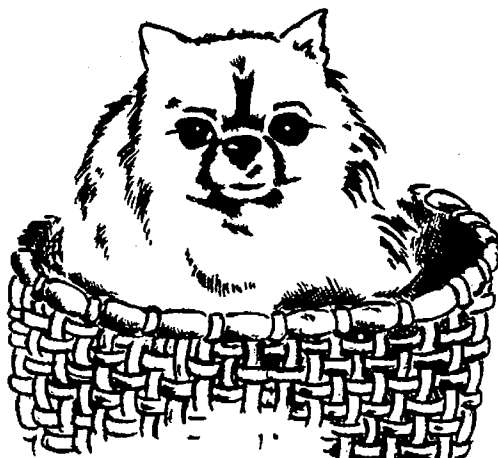


命の値段／エリ物語

私の母は58歳です。20年程前メニエール氏病という病気にかかり左耳は聞こえず、精神的にも肉体的にも極度のストレスがかかると、吐き気とめまいを伴い、立つことも出来ない状態になります。ひどい時には、意識さえ薄れる事もあります。しかしここ数年少しの発作はあったものの、一年前から始めた気功が母のからだによかったのか、最近はとても調子がよかったです。そう、あの日までは。母は忘れることの出来ない日だといえます。1996年1月14日(日曜日)午後6時30分、夕方からばらばらと雨が降っていました。買い忘れていたものがあったので、買い足しにと家の玄関を出ようとしたとき、エリ(ポメラニアン 13歳)が母の足下にまとわりついてきました。母は、「すぐ帰るから、まっていてよ。」と言って、一度はドアを閉めたのですが、いつも聞き分けのいいエリがこの日に限ってとても泣いたそうです。

置いていくのがかわいそうになった母は、エリ専用のカゴに入れ、上からビニールをかけ、自転車で出かけました。少し雨は降っていたものの傘をさすほどでもありませんでした。走り出してから5分もたたない時のことです。あたりはすでに暗くなっていました。いつも通る曲がり角を曲がって2〜3秒ほどたったとき、前からものすごい光が母に迫ってきました。目がくらむほどでした。それは3輪バイクでした。危ない、あたる、と思う間もなくそのバイクは、母の自転車の前カゴめがけてつっこんできました。その瞬間、母も自転車も、その場に倒れました。はっと気を取り直し、「エリ、エリ！」と叫びました。カゴは、押しつぶされたような状態でした。あたってきたバイクの男の子は、びっくりした様子で母に駆け寄ってきました。「だいじょうぶですか?」「カゴに犬がのっているんや!もどに戻して!」彼に叫び、カゴをもどに戻させました。エリを取り出した時にはかなりの出血で息をしているかどうか分からない状態でした。「すぐ近くに病院がある。ついてきて!」母は自転車をおこし、前にエリを乗せ、走り出しました。少しいったところで、ふっと振りかえって見ると、ついてきているはずの男の子の姿はもうありませんでした。当て逃げをした彼を捜すことよりエリの病院に行くことしか母の頭の中にはありませんでした。日曜日にもかかわらず先生は、心よく診察してくださいました。ただ、あまりにもひどい状態のエリとうろたえるばかりの母の姿にびっくりされました。元気なときからのかかりつけのお医者様で、エリのことはよくご存じの先生に、母は手をあわせて頼みました。「何とか助けてやって下さい。」「するだけのことは、やってみましょう。」そう先生はおっしゃると「あなたも、ただごとではない様子です。とにかく落ち着いて。今すぐ病院に行ってもらいしやい」警察に届け出をした後、後ろ髪をひかれる思いでエリを先生に託し、近くの救急病院へ行き手当をうけました。その後家に戻り、母は気を取り直しつつも、あの状態ではあきらめざるをえないだろうと泣きながら、亡くなったときに包んでやる布や箱を用意し、エリのところに持ってい



ました。先生は「今日は徹夜になるだろうから、家にかえっていなさい。」付き添いたいという母にそうおっしゃいました。家に戻ってしばらくした母に、あの持病のメニエール氏病がおそいかかったのです。極度のストレスが一気に母にのしかかり、立つことも出来ず、はったままの状態でご近所の方に電話をし、そのまま病院へ運ばれました。その後、私のところに連絡がはいったのは、夜11時半を過ぎていたころでした。なにが何だかわからずに、不安な気持ちで一夜を過ごし、朝一番の新幹線で姫路から大阪へむかいました。自家にかえると、母は病院から帰りベッドに寝ていました。エリが心配で、病院で点滴だけを受け、もどってきたそうです。私の顔を見るなり泣きじゃくりました。「わたしのせいや!あのときエリがせがんでも、連れていかなければこんな事にならなかった!私の身代わりになったんや!」と。

母は、この家でエリと二人きりの生活をしてきました。

犬を飼っていない人には理解できないかもしれないけれど、母にとってエリは、たった一人の大切な家族です。朝起きてから夜寝るまで、共に生活をし、エリに話しかけ、エリも母の気持ちはすべてわかっていたと思います。お互いになくはない存在になっていました。それだけに母の悲しむ姿を見て、思わず私も涙がとまらなくなりました。あの哀れな年老いた母の後ろ姿は、一生忘れることはできません。

この日は一日中食事もとらず、眠るか泣いているかという状態でした。エリの方は、一進一退の病状が続いていました。先生からの呼び出しの電話がかからない事だけを祈り続けました。

こんな母を残して帰ることが出来なかった私は、子供の学校も休ませ、看病をすることにしました。二日後、姫路に帰った私は、母のかすかな記憶を手がかりにあの男の子を探す作業に入りました。三輪バイク、後ろに白いボックス、たぶんビザの宅配であろうとのこと。一軒一軒、東住吉区内のビザ屋に電話をし、ボックスの色を尋ねました。そのうち四軒が浮上し、相手であるDビザをみつけたのです。最初Dビザの店長は、「うちは社員教育を徹底させているのでまず違うと思う。どんなに小さな接触事故でも報告するよう義務づけてあるから。」とのことでしたがそれでも調べてほしいと頼みました。こうして相手を見つけたしました。彼は、会社に報告を怠っていたのです。私が調べだしてから三日後のことです。事故からはすでに六日がたっていました。調べられなければ彼は名乗り出たのでしょうか?その後母が彼に再会したのは、1月23日(火曜日)警察の事情聴取を受けた日でした。母は、彼の顔を見るなり「こいつや!」泣きながら叫びました。私も母を、エリを、こんな姿にしてしまったこの人物を許す事は出来ないと思い、改めて憎しみがこみ上げてきました。警察の事故処理が終ったあと彼と話し合い、逃げたことを認めさせ、そしてエリがいる病院に連れていきました。エリの横たわり酸素ボンベをつけた姿を見た彼は、水がまかれた後の床に土下座をしエリに謝りました。「あなたにも、大切にしている家